

我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 改定案 <植物>  
【国外由来の外来種】

- 対策優先度の要件(※対策優先度の要件は防除推進外来種のみ記入)  
 ① 生態系に係る潜在的な影響・被害が特に重大  
 ② 生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い  
 ③ 絶滅危惧種等の生態・生育に重大な被害を及ぼす可能性が高い  
 ④ 人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して重大な被害を及ぼす

- 選定理由  
 I. 生態系被害のうち文種が確認されている、又はその可能性が高いもの。  
 II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、又はその可能性が高いもの。  
 III. 人体に重大な被害を引き起こす、又はその可能性が高いもの。  
 IV. 生態系被害のうち種会又は改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高いもの。  
 V. 生態系被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えており、かつ分布拡大・拡散の可能性もあるもの。

リスト掲載種の並び順について  
 藻類、コケ植物、シダ植物、裸子植物、被子植物の順である。コケ植物の並びは岩月(2001)による。シダ植物はPPG I (2016) A community-derived classification for extant lycophytes and fernsによる。裸子植物は環境庁自然保護局(1994) 自然環境保全基礎調査植物目録修正版および朝日新聞社(1997)朝日百科 植物の世界 の植物分類表による。被子植物は THE ANGIOSPERM PHYLOGENY GROUP (2016) An update of the Angiosperm Phylogeny Group classification for the orders and families of flowering plants: APG IVによる。

※特段の防除取組みが要請される区域: 防除推進外来種にカテゴリ分けされた植物について、特に防除取組みを推進すべき区域を整理  
 生物多様性保全上重要な地域: 国立公園や世界自然遺産地域等の原生的自然や固有種・絶滅危惧種の主生・生育する地域等  
 公共緑地: 都市公園など

※特定外来生物に限り、指定時の科名とAPG-PPG分類の科名が異なる場合は指定時の科名を( )内に併記

2026/3/27時点

No.	定着段階	特段の防除取組みが要請される区域	カテゴリ	対策優先度の要件	特定外来生物	科名	和名(別名、流通名)	学名	特に問題となる地域や環境	選定理由	評価項目														原産地・分布(日本を除く)	日本での分布	形態	生育環境など	日本での利用状況	利用上の留意事項	備考	抽出根拠等	文献等	防除事例	防除マニュアル	他法令での位置付け						
											定着可能性	生態系被害	分布拡大・拡散				重要地域	特に問題となる被害	逸出・拡散																							
											生物	導入	結合	交雑	改変	散布	繁殖	気候	永続	重要地域	人体	経済	産業	利用	付着	導入																
<b>侵入・定着防止外来種(未定着)</b>																																										
<b>侵入予防外来種(まだ侵入していない種)</b>																																										
1	未定着		侵入予防外来種		特定外来	イネ科	ピーテグラス	<i>Ammophile arenaria</i>	海岸砂丘。	IV	◎	○	(◎)	(○)	◎	◎	◎	◎	◎	○	(○)	○	○	-	-	-	-	-	-	-	ヨロコビ海岸地域産。北米東部、オーストラリア南部、ニュージーランド、南アフリカ、チリに外来分布。	-	12m、多年草	有機物が少なく、排水性の良い砂丘等。	本種の利用に関する情報は得られなかった。	-	7各県・東京・長崎、⑧海外:ISSG	有用、Peterson et al. 2022、Mostow et al. 2021、2024、Askerooth et al. 2024	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。	
2	未定着		侵入予防外来種		特定外来	タスキモ科	ウトウリクラリア・インフラタ、ウトウリクラリア・プラテンシス	<i>Utricularia inflata, Utricularia platensis</i>	湿地。	IV	◎	○	(◎)	-	-	◎	◎	◎	◎	○	○	○	-	-	(◎)	(○)	-	-	-	-	-	浮遊性の多年草、食虫植物	湖沼、ため池、湿地。	ウトウリクラリア・インフラタとして販売されていたものがエフクラタキモだったことがある。	-	⑥専門家・選地B(エフクラタキモ)、⑦各県・長崎、⑧その他:環境省、検討委員	USDA, GOW, H31第8回(総合植物資料)、POWO, Kadono et al. 2019、Titus & Grisde. 2009, WA, CARNIVOROUS PLANT NURSERY	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。		
3	未定着(小笠原・南西諸島で特に注意)		侵入予防外来種			マメ科	メスキート(キャベ)	<i>Prosopis juliflora</i>	乾燥地。	IV	○	○	(◎)	x	○	◎	(◎)	○	(◎)	○	○	○	(○)	-	-	-	-	-	-	-	熱帯アメリカ、西インド諸島産。アフリカ、オーストラリアに外来分布。	-	8m、亜高木、樹がある	海岸地方から高原の乾燥地に生育する	本種の利用に関する情報は得られなかった。	-	⑧海外:ISSG、⑩検討委員	有用、ブラジル	吉川寛:メスキートの侵略戦略に対抗するための策 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpf/92/0/92/54/pdf/-char/ja/jaURL取得日:2026年3月13日	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。
4	未定着		侵入予防外来種			キク科	キダチカクコウアザミ(アゲラティナ・アデノフォラ)	<i>Ageratina adenophora</i>	開けた森林、林縁、川岸、湿った苔の多い海岸。	V	◎	○	(◎)	x	-	◎	(◎)	○	(○)	-	-	(○)	(○)	-	-	(◎)	(◎)	-	-	-	メキシコ産。オーストラリア、北米、南米、ヨーロッパ、アジア、アフリカに外来分布。	-	多年草	鉄道や道端等の荒地、農耕地、牧草地、開けた森林、林縁、川岸、湿った苔の多い海岸。	本種の利用に関する情報は得られなかった。	-	⑧海外:ISSG、⑩検討委員	Ylist, EPPO	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。	
<b>定着防止外来種(侵入事例はあるが定着していない種)</b>																																										
5	未定着(小笠原・南西諸島で特に注意)		定着防止外来種			ヤシ科	シマケンチャヤシ(ユスラヤシモドキ)	<i>Archontophoenix cunninghamiana</i>	海岸、自然林、河川、かく乱地等。	IV	◎	◎	(◎)	x	-	◎	(◎)	○	(◎)	○	○	-	-	○	-	-	○	-	-	オーストラリア東北部産。ブラジル、ニュージーランド、ニューカレドニア、南アフリカに外来分布。	露地栽培の北限は九州南端とされる。	30m、常緑高木	海岸、自然林、河川、かく乱地、市街地。ある程度の耐寒性と耐陰性がある。	観葉植物、優美な姿を観賞するために栽培される。	耐陰性があり、水や風により種子が散布されることから、生物多様性の保全上重要な地域へ侵入するおそれのある種には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎・沖縄、⑧海外:ISSG	有用、園芸事典、JF	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。		
6	未定着		定着防止外来種			ベンケイソウ科	クラッスラ・ヘルムシー(クラッスラ・ヘルムシー、クラッスラ、クラウストラ・ヘルムシー)	<i>Crassula helmsii</i>	湿地。	IV	◎	◎	(◎)	-	-	◎	(◎)	◎	(○)	-	-	(◎)	-	-	-	-	-	-	-	オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、ロシアに外来分布。	-	0.2m、多年草	湿地や水辺を好む。	アクアリウムで利用される。水圏内での栽培の難易度は普通。	水により断片が散布されることから、自然水域に持ち込まない。	海外で侵略的な外来種とされている。アズマツクサ属と同じ仲間、和名(通称名)は学名による。アズマツクサ属の栽培種が日本で採集されている。	7各県・東京・長崎・沖縄、⑧海外:ISSG	水Ⅰ	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。	
7	未定着		定着防止外来種			ゴミ科	ホソギミ(ロシアンオーリーブ、ヤナギバシ、スナナツメ)	<i>Elaeagnus angustifolia</i>	湿地や河原。	IV	○	◎	(◎)	-	◎	◎	(◎)	○	(◎)	-	-	(◎)	-	-	-	-	-	-	-	ヨロコビ南部~西インド洋諸島、ヨーロッパ、オーストラリア、北米、太平洋諸島に外来分布。	農耕地、河川、川岸、水辺、森林、森林、実生には耐陰性があり、乾葉を堆肥化し、雑草を含み、様々な土壌、水分条件下に生育する。他の植物との競争に耐え、萌芽生長により広がる。	9m、落葉低木、樹がある	河川、自然林、川岸、水辺、森林、農耕地、河川、川岸、水辺、森林、森林、実生には耐陰性があり、乾葉を堆肥化し、雑草を含み、様々な土壌、水分条件下に生育する。他の植物との競争に耐え、萌芽生長により広がる。	観葉植物として販売されている。	生物多様性の保全上重要な地域に侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎、⑧海外:ISSG	有用、Ylist、園芸事典	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。		
8	未定着		定着防止外来種			クワ科	フランスゴムノキ(コバノゴムビワ、コバノゴム)	<i>Ficus rubiginosa</i>	暖かい地域の自然林。	IV	○	◎	(◎)	-	-	◎	(◎)	○	(◎)	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	オーストラリア原産。ニュージーランド、南アフリカ、北米、太平洋諸島に外来分布。	自然林、植林地、川岸、低木林、市街地にもみられる。環境への適応性は高い。	30m、常緑高木	観葉植物、観賞用に販売されている。	動物により種子が散布されること等から、生物多様性の保全上重要な地域に侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎、⑧海外:ISSG	JF	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
9	未定着(小笠原・南西諸島で特に注意)		定着防止外来種			イラクサ科	ヤツデグワ(ガルモ)	<i>Cecropia peltata</i>	森林、かく乱地、林縁等。	IV	◎	○	(◎)	x	-	◎	(◎)	○	(◎)	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	熱帯アメリカ産。熱帯アジア、太平洋諸島に外来分布。	低地の森林、かく乱地、沿岸、森林のギャップ、植林地等にもみられる。	20m、常緑高木	観葉植物、沖縄等の暖地や温室等で観賞用に栽培される。	鳥により種子が運ばれて森林に侵入すること等から、生物多様性の保全上重要な地域に侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎、⑧海外:ISSG	①要注意、②W100-IUCN、③各県・長崎・沖縄、⑧海外:ISSG	⑦外来生物	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。		
10	未定着(小笠原・南西諸島で特に注意)		定着防止外来種			イラクサ科	ケクロピア・シュレベリアナ	<i>Cecropia schreberiana</i>	自然林、植林地、草地、川岸、かく乱地。	IV	◎	○	(◎)	x	-	◎	(◎)	○	(◎)	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	コスタリカ、ジマインカ等が原産。ボリネシア等に外来分布。	自然林、植林地、草地、川岸、かく乱地。日当たりの良い肥沃地を好む。	20m、常緑高木	温室での栽培例がある。	鳥により種子が運ばれて森林に侵入すること等から、生物多様性の保全上重要な地域に侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎・沖縄、⑧海外:ISSG	ISSG	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
11	未定着		定着防止外来種			カバノキ科	ヨーロッパハンノキ(オウシュウカバノキ、セイウヤマハンノキ、グルトノーザハンノキ)	<i>Alnus glutinosa</i>	湿地。	IV	◎	◎	(◎)	(○)	○	○	(◎)	○	(◎)	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	ヨーロッパ、コーカサス、シベリア西部、北アフリカ原産。オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、南アフリカ、アメリカ等に外来分布。	湖沼、自然林、植林地、河川、川岸、市街地、荒地、湿地。日当たりの良い、湿った土壌を好むが、乾燥にも耐える。葉面固定を行う。	20m、落葉高木	観賞用や庭木として栽培される樹木、北海道、青森県、岩手県で栽培。	生物多様性の保全上重要な地域に侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・青森・東京・長崎、⑧海外:ISSG	便宜、有用、園芸事典、JF、ISSG	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
12	未定着(小笠原・南西諸島で特に注意)		定着防止外来種			フトモモ科	タチバナアデク(ピタンガ、スリナムチェリー、ブラジリアンチェリー、カイエンチェリー、カボチャアデク)	<i>Eugenia uniflora</i>	暖かい地域の自然林。	IV	◎	◎	(◎)	x	-	◎	(◎)	○	(◎)	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	南米産。熱帯アジア、オーストラリア、ヨーロッパ、北米、太平洋諸島に外来分布。	自然林、植林地、草地、低木林。海外では、果樹として栽培されたものが野生化。	10m、常緑低木又は小高木	観賞用や庭木として栽培される樹木、温室で栽培される。	温暖帯~熱帯地域では、生物多様性の保全上重要な地域へ侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎・沖縄、⑧海外:ISSG	有用、Ylist、JF	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
13	未定着(小笠原・南西諸島で特に注意)		定着防止外来種			フトモモ科	ムラサキフトモモ(アマゾンチェリー、ジャンボラン、ヨウミキアデク、メジラック、ムレザキフトモモ)	<i>Syzygium cumini</i>	森林。	IV	◎	◎	(◎)	-	-	◎	(◎)	○	(◎)	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	インド~マレーシア産。東南アジア、オーストラリア北部、アフリカ、熱帯アジア、熱帯アメリカ、太平洋諸島に外来分布。	自然林、熱帯および亜熱帯気候の広い環境条件下で生育する。洪水や干ばつにも耐える。	30m、常緑高木	観賞用や庭木として栽培される樹木、各地で果実を食用するために栽培される。果用、木材等にも利用される。種々の品種もある。	生物多様性の保全上重要な地域へ侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎・沖縄、⑧海外:ISSG	有用、Ylist、JF	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
14	未定着(小笠原・南西諸島で特に注意)		定着防止外来種			ノボタン科	アメリカカサノボタン(クリデミア・ヒルダ)	<i>Miconia crenata</i>	自然林、草原、水辺、かく乱地、低木林等。	IV	◎	◎	(◎)	x	-	◎	(◎)	○	(◎)	○	○	-	-	(◎)	○	-	-	-	-	熱帯アメリカ産。熱帯アジア、太平洋諸島に外来分布。	自然林、草原、水辺、かく乱地、低木林。	4m、常緑低木	観賞用の温室で栽培される。温室の植物に適している。	鳥、人、車等によって分布拡大すること等から、生物多様性の保全上重要な地域へ侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	7各県・東京・長崎・沖縄、⑧海外:ISSG、⑩その他:検討委員	園芸事典	-	-	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			





























No.	定着段階	特設の防除 取り組みが 要請される 区域	カテゴリー	対策要 求の要 素	特定 外来 生物	科名	和名(別名、流通名)	学名	特に関心となる 地域や環境	定着理由	評価項目											原産地・分布 (日本を除く)	日本での分布	形態	生育環境など	日本での利用状況	利用上の留意事項	備考	抽出機関等	文献等	防除事例	防除マニュアル	他法令での位置付け
											定着可能性		生態系被害		分布拡大・拡散		重要 地域	特に関心 となる被害 人体	経済 被害	退出:拡散 利用	付着 利用												
											生物	導入	競合	交雑	改変	散布																	
205	定着初期/限定分布		防除検討 外来種			キク科	ハイコウリンタンポポ	<i>Pilosella officinarum</i>	草地。	IV														2006年に北海道で初めて定着された。北海道、本州(兵庫県以北)に局所的に分布。	大高洋沿地域。北東アジア、北米、ニュージーランド等に外来分布。	5~15cm、小葉の植物	海外では草地、草地等のかく乱地へ拡大、日のぬく当たる開けた環境を好む。国内では芝生付近、車道沿いで確認がある。	日本各地に侵入しており、草地等の拡大に付随して急速に分布拡大する可能性があることから、生物多様性の保全上重要な地域に侵入するおそれのある場所には、持ち込まない。	本種は遠くに定着を伸ばして旺盛に子孫を作って繁茂し、地面をマット状に覆いつくす。海外では牧草地の雑草として知られ、広がりが非常に速いとされる。また、在来種の生育環境や草地への影響も報告されている。 Pilosella属は国内で最初に定着し、アポロキウス(葉をすりつぶして眼に塗る民間療法で増える系統を作るため、日本国内でハイコウリンタンポポと呼称されているPilosella officinarum)について、詳細な検討が今後必要であると述べている。	7各県・愛知、①その他:検討委員	PSW、立花2022、中野・本等2013、増村2013、Frensch K.2021、増田2012	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。	
206	定着初期/限定分布(小笠原・南西諸島で特に注意)		防除検討 外来種			キク科	タワダギク	<i>Pluchea carolinensis</i>	草原等。	IV														北米～南米北部産地、ハワイに外来分布。	戦後定着。沖縄島とその周辺島嶼、小笠原に分布。	3m、低木	沖縄島中部の日当たりの良い開野を中心に確認されているが、近年は沖縄島全域と周辺の島嶼、小笠原諸島でも見られる。	本種の利用に関する情報は得られなかった。	-	7各県・東京・長崎・沖縄	便宜、写真図鑑、野生植物、GAWW	-	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。
207	定着初期/限定分布(小笠原・南西諸島で特に注意)		防除検討 外来種			キク科	ヒマワリカクコウ	<i>Praxelis clematidea</i>	草地等。	IV														南米地域が原産。東南アジア、中国、台湾、日本、オーストラリア等に外来分布。	約40~60cm、最大で1m、一年草	道路脇や鉄道沿線、牧草地、開けた森林、河川敷、草地等。	本種の利用に関する情報は得られなかった。	-	7各県・沖縄、①その他:検討委員	askf/as、POWO、WFO、NSW Government	-	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。	
208	分布拡大期～まん延期		防除検討 外来種			キク科	アラゲハンゴンソウ(キヌガサギク、ルドベキア・ヒルタ、グロリアオサージ、マツカサギク)	<i>Rudbeckia hirta</i> var. <i>pulcherrima</i>	湿原、自然草原。	II, IV														1930年頃に渡来。北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布。	1930年頃に渡来。北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布。	0.9m、二年草	造成地、牧場、牧草等。全国の山岳道沿いにみられ、北海道の原生花園やアポロキウスの麓にも生育する。	グロリアオサージ「Gloriosa Daisy」をはじめ、様々な園芸品種が利用される。	オオハンゴンソウの近縁種、アポロキウスの生物多様性の保全上重要な地域で原産の在来植物との競合、駆逐が懸念される。こうした種間競争による在来種のある場所には、持ち込まない。	5各県・H20・4、⑥専門家・環境27、⑦各県・北海道・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・奈良・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:10.6	便宜、写真図鑑、園芸書籍、JF、有用、園芸書典	北海道森林管理局、知床ウトロオムトドGSS通信 令和5年8月13日(日曜日) 外来種駆除イベント <a href="https://www.rnra.maff.go.jp/hokkaido_koho_blog/gretelko/2023/2308.html">https://www.rnra.maff.go.jp/hokkaido_koho_blog/gretelko/2023/2308.html</a> [URL取得日:2026年3月13日]	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。
209	分布拡大期～まん延期		防除検討 外来種			キク科	ネバリノギク(アメリカシオン)	<i>Symphotrichum novae-angliae</i>	半自然草地。	IV														北米産地。ヨーロッパ、ニュージーランドに外来分布。	大正時代に園芸植物として渡来。北海道に分布。本州～九州で逸出。	1.5m、多年草	山科周辺の道端、荒地、山野等で野生化している。	近年はあまり観測されない。	-	①要注意、②W100:日本、③村中・④:7各県・北海道・東京・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・奈良・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:2.24	便宜、写真図鑑、園芸書典、GCW、各県:北海道	-	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。
210	分布拡大期～まん延期		防除検討 外来種			キク科	ユウゼンギク(メリケンギク、シノノギク、ユウゼンノギク)	<i>Symphotrichum nov-belgii</i>	半自然草地、湿原。	IV														北米産地。ヨーロッパ、ニュージーランドに外来分布。	大正時代に園芸植物として渡来。北海道～九州に分布。	0.7m、多年草	山野。	様々な花色の園芸品種が草花類として流通、利用されている。花壇、切り花、鉢物に利用される。	北海道では急速に分布を拡大し、草原への侵入が危惧されることから、特に北海道の草原には持ち込まない。	7各県・北海道・青森・福島・群馬・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・奈良・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:2.6	国士交通省北海道開発局河川河川事務所:石狩川下流河川地区自然区画 外来種駆除イベントの開催(ふらっと河川主催) <a href="https://www.hkd.mlit.go.jp/ebetu_kasen/gbur/00000033.html">https://www.hkd.mlit.go.jp/ebetu_kasen/gbur/00000033.html</a> [URL取得日:2026年3月13日]	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。	
211	分布拡大期～まん延期		防除検討 外来種			キク科	オオオナモミ	<i>Xanthium orientale</i> esp. <i>orientale</i>	オオオナモミの生育地や河川敷。	I, IV, V														メキシコ産地。ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカに外来分布。	1929年渡来。北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布。	2m、一年草	河川敷、畑地、樹園地、牧草地、路傍、荒地等に生育。	利用に関する情報は得られなかった。	-	①要注意、②W100:日本③村中・④:4各県・北海道・青森・福島・群馬・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・奈良・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:61.97,100	原島浩一 主要外来雑草の特性と防除法 <a href="https://www.snowee.co.jp/wp-content/uploads/grass/grass_199908_06.pdf">https://www.snowee.co.jp/wp-content/uploads/grass/grass_199908_06.pdf</a> [URL取得日:2026年3月13日]	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。	
212	定着初期/限定分布(小笠原・南西諸島で特に注意)		防除検討 外来種			ウコギ科	ヤドリカノキ(ホンコンカボック、シェフレア・アルボリナラ、シェフレア・カボック)	<i>Heptaleurum arboricola</i>	岩場や林縁、湿った林内。	IV														台湾、中国海南島産地。	小笠原諸島、南西諸島に分布する。奈良市の都市部でも分布。	7m、半木質性の常緑小高木	岩場や林縁、湿った林内等に逸出している。0℃程度に耐え、乾燥、日照不足にも強い。萌芽力も高い。	実質が多く、観葉植物としてホンコンカボックの様々な品種が流通、販売されている。生花、盆栽、公園樹、観葉植物に利用される。	以前は本種は <i>Schefflera arboricola</i> として扱われていたが、近年の研究によって、分子系統情報から <i>Heptaleurum</i> 属と見做されている種がしばしばある。多くの <i>Schefflera</i> 属に分類されていた種も移された。	7各県・東京・長崎・鹿児島・沖縄、⑦検討委員	野生植物5、地球樹木、JF、Vlist、小笠原諸島、有用、園芸書典、山田・住村2020	-	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。
213	分布拡大期～まん延期		防除検討 外来種			ウコギ科	カミヤツダ(ツウソウ(通葉)、ツウダツボク(通葉木))	<i>Tetrapanax papyrifer</i>	河川敷や林縁。	IV														中国南部、台湾、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカに外来分布。	1935年以前に渡来。関東～九州、南西諸島に分布。	7m、常緑低木	河川敷、湿原、土壌を好む。関東地方では寒くて落葉低木となる。	観賞用に栽培される。幹の髄は通草として生花の材料にされた。薬用にも利用される。	島により種子が散布され、河川敷等で繁殖。小型の在来種を駆逐したり、農耕地に侵入して雑草化する。また、河川敷に侵入して土壌を改良する。また、河川敷に侵入して土壌を改良する。また、河川敷に侵入して土壌を改良する。	7各県・茨城・埼玉・千葉・東京・静岡・愛知・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:2.24	大西正 森林へ広がる外来種たち <a href="https://www.museum.hokkaido.ac.jp/topics/7592">https://www.museum.hokkaido.ac.jp/topics/7592</a> [URL取得日:2026年3月13日]	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。	
214	分布拡大期～まん延期		防除検討 外来種			セリ科	ドクニンジン	<i>Conium maculatum</i>	畑地、牧草地、路傍、荒地、草地、森林、川岸、湿地等。	III, IV, V													ヨーロッパ産地。南北米、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカに外来分布。	1959年渡来。北海道、本州の一部に分布。	2m、一年草	畑地、牧草地、路傍、荒地等。	本種が市販されているとの情報は得られなかった。	①要注意、②FAO:7、⑦各県・北海道・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・奈良・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:0.02	世田、I、便宜、便宜、写真図鑑、有用、園芸書典、Vlist、GCW	北海道大学総合博物館:外来植物の駆除(ドクニンジン・オオハンゴンソウ) <a href="https://www.museum.hokkaido.ac.jp/topics/7592">https://www.museum.hokkaido.ac.jp/topics/7592</a> [URL取得日:2026年3月13日]	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。		
産業管理外来種(適切な管理が必要な産業上重要な外来種)																																	
215	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			イネ科	コヌカガサ(レッドトップ)、クロコヌカガサ	<i>Agrostis gigantea</i> , <i>Agrostis nigra</i>	河川敷、自然草原、絶滅危惧種の生育地周辺。	I, II, IV													ヨーロッパ産地。南北米、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカに外来分布。	明治初年に導入。1885年(明治18年)にアフリカ、アジア、オセアニア、南北米等、通葉～寒帯に外来分布。	1m、多年草	畑地、牧草地、樹園地、路傍、草原、湿地、水辺等。日当たりの良い所を好む。耐陰性も強く、強酸性土壌にも生育し、耐塩性もある。遊牧地であれば土壌の雑草をばたないが、一般に乾草土壌～塩土壌に多く、やせた土地にも適する。	飼料用、特に放牧時に利用されている。種子流通量は多くはないが、国内の種畜から販売されている。牧草としては、生産性や栄養価はあまり高くないものの、やせた土地等の条件下でも生育し、強酸性土壌にも生育し、耐塩性もある。遊牧地であれば土壌の雑草をばたないが、一般に乾草土壌～塩土壌に多く、やせた土地にも適する。	国立公園や草原に特有な希少種が生ずる自然草原の周辺では可能な限り利用を控える。このような場所では利用する場合は、種子の逸出を防止するための措置が必要である。本種は交雑しやすいため、絶滅危惧種の生育地や希少種の生育地には、種子の逸出を防止する必要がある。牧草地への種子の逸出を防止するために、結果的に利用する場合は、牧草利用に付随して、利用しない種子については放置せずに適切に処分する。その他の非農産物的な用途として草種雑化(圃場や法面の緑化)の観点から非常に役に立っていることから、広く利用されている。	①村中・B、⑦各県・北海道・青森・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・奈良・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:52.87,93、⑨三管:環・林・園道、⑩海外:ISSG	北海道道根室振興局:多年生イネ科雑草レッドトップ <a href="https://www.nemuro.pref.hokkaido.lg.jp/fo/9/0/9/7/1/6/9/1/">https://www.nemuro.pref.hokkaido.lg.jp/fo/9/0/9/7/1/6/9/1/</a> <a href="https://www.env.go.jp/park/nikko/05_h022/naushisemomori/kkayokubutu_houkoukyodou.pdf">https://www.env.go.jp/park/nikko/05_h022/naushisemomori/kkayokubutu_houkoukyodou.pdf</a> [URL取得日:2026年3月13日]	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。		
216	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			イネ科	カモガヤ(オーチャードグラス)	<i>Dactylis glomerata</i>	山地草原、海岸草原、河川敷。	II, IV, V													地中海～西アジア産地。ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア、南北米等の温帯に外来分布。	1861～1864年(文久年間)に渡来。1865年(明治初年)にアフリカから導入。北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布。	1.5m、多年草	畑地、樹園地、路傍、荒地、土手、草地、河川敷、林縁、遊地、沿岸帯等。日当たりの良い温帯地で、肥沃な所を好む。	飼料用(主に採草用)としてチモンシと並び最も広く利用されており、沖縄を除く全国で栽培されている。特に北海道～東北地方では高幹となる雑草。牧草として利用する際、種子が結実する可能性がある。希少種の生育地や希少種の生育地には、種子の逸出を防止するための措置が必要である。本種は交雑しやすい。結果的に利用する場合は、牧草利用に付随して、利用しない種子については放置せずに適切に処分する。その他の非農産物的な用途として草種雑化(圃場や法面の緑化)の観点から非常に役に立っていることから、広く利用されている。	国立公園や、特有の希少種が生ずる自然草原の周辺では可能な限り利用を控える。このような場所では利用する場合は、種子の逸出を防止するための措置が必要である。本種は交雑しやすい。結果的に利用する場合は、牧草利用に付随して、利用しない種子については放置せずに適切に処分する。その他の非農産物的な用途として草種雑化(圃場や法面の緑化)の観点から非常に役に立っていることから、広く利用されている。	①要注意、②W100:日本③村中・A、④FAO:10、⑥専門家:草原42、⑦各県・北海道・青森・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・奈良・和歌山・鳥取・香川・高知・福岡・長崎・大分・宮崎・鹿児島、⑧河川:57.104,105、⑨三管:環・林・園道、⑩国産	環境省関東地方環境事務所:令和2年度那須平成の森林化植物等管理業務報告書(22) <a href="https://www.env.go.jp/park/nikko/files/01_R2_h22envinmst_exoticplant_report_1.pdf">https://www.env.go.jp/park/nikko/files/01_R2_h22envinmst_exoticplant_report_1.pdf</a> [URL取得日:2026年3月13日]	植物防疫法では輸入時に検査を行うことが定められている。		



No.	定着段階	特設の防除 取組みが 要請される 区域	カテゴリー	対象外来種 の要件	特定 外来 生物	科名	和名(別名、流通名)	学名	特に問題となる 地域や環境	選定理由	評価項目													原産地・分布 (日本を除く)	日本での分布	形態	生育環境など	日本での利用状況	利用上の留意事項	備考	抽出根拠等	文献等	防除事例	防除マニュアル	他法令での位置付け			
											定着可能性	生態系被害	分布拡大・拡散			重要 地域	特に問題 となる被害 種	経済 産業	進出・拡散	付着 利用	付着 利用	付着 利用	付着 利用													付着 利用	付着 利用	
											生物	導入	競合	交雑	変異	散布	繁殖	気候	連続	重要 地域	特に問題 となる被害 種	経済 産業	進出・拡散													付着 利用	付着 利用	
225	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			イネ科	ナギナタガヤ類(ナギナタガヤ(ホズミノシツボ)、オオナギナタガヤ、イヌナギナタガヤ)	<i>Vulpia myuros, Vulpia myuros</i> var. <i>magalura, Vulpia bromoides</i>	海岸砂地、草原、河川敷。	IV																ヨーロッパ～アジア原産。アフリカ、アジア、オーストラリア、南太平洋諸島、北太平洋諸島、南太平洋諸島に分布。	0.6m、一年草	畑地、牧草地、庭、路傍、荒地等。日当たりの良い砂質土壌を好む。海辺の砂地、乾いた草地に多い。	密な群落を作って他の雑草を抑えるため、近年は果樹園や道端の草防除剤の一つとして、改良品種を含むナギナタガヤが、流通、販売され、栽培されている。	果樹園等で利用する際には、利用しない種子を放置せずに適切に処分する。	海外で侵略的な外来種とされる。 これまでにナギナタガヤはそれほど大きな問題にはなっていないが、大量に種子が繁殖することにより、周辺への影響を心配される。温暖帯の畑地、牧草地の雑草となっている。	③科中・B、⑦各県、北海道・青森・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知県・滋賀・京都・奈良・和歌山・鳥取・徳島・高知・福岡・長門・中分・宮崎・鹿児島、⑧河川・52.91.98	世耕田、便宜、写真図鑑、PSW	—	—	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。	—	—
226	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			マメ科	ハリエンジュ(ニセアカシア)	<i>Robinia pseudacacia</i>	河原、海岸林、リンゴ園の周辺。	II、IV																北米合衆国産。ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、南米に外来分布。	25m、落葉木、刺がある	市街地や海岸から低山地までの荒地、土手、野原等に生育し、しばしば群生する。	苗木そのものは高温多湿の梅雨時に、ヘアワックスの花が果実に付着することにより繁殖するとの報告があるため、リンゴ園周辺では、一定の距離を置く等の管理が望ましい。 海岸林については、倒伏による危険やクロマトクニに影響を及ぼさない管理が必要である。	生物多様性の保全上重要な地域に侵入し、河川管理上の障害になる等、各地で防除が行われている。 H24に改正された害虫防除法第六条では、「重要種を絶滅、除去、又は根絶しようとする者は、その目的に反しない限りにおいて、資源植物の増大を旨としてこれを行わなければならない」と定められ、国・地方公共団体に重要種の保護・増殖に対する必要な施策を講ずることが求められている。	①要注意、②W100、日本、③科中：A(4)FAO:10、⑤対策：H20.6、H23.4、⑥専門家：河原 50、⑦各県、北海道・青森・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・長野・岐阜・静岡・愛知県・滋賀・京都・奈良・和歌山・鳥取・徳島・高知・福岡・長門・中分・宮崎・鹿児島、⑧河川・ISSG	世耕田、便宜、写真図鑑、PSW	丹野幸太・前田誠：伐採・根絶によりハリエンジュ駆除効果と今後の課題 https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/kaheya/para/tekkibitmt[URL取得日:2026年3月13日]	国土交通省：河川における外来植物対策の手引き(3章対策を優先すべき主要外来植物10種の生物的特徴と対策手法・ハリエンジュの生物的特徴と対策手法) https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/kaheya/para/tekkibitmt[URL取得日:2026年3月13日]	—	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。		
227	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			マメ科	シロツメクサ(ホワイトローバー、シロクローバー)	<i>Trifolium repens</i>	高山・亜高山帯の草原。	II、IV																ユーラシア原産。ヨーロッパ、北アフリカ、アジア、オーストラリア、南米に外来分布。一部の熱帯地域に外来分布。	1.5m、つる性	畑地、牧草地、路傍、荒地等に生育し、高地までもみられる。耐寒性が強く、土壌の種類を選ばない。	飼料用(放牧・採草用)や緑化用等として広く利用され、多くの種畜会社から種子が販売されており、公的機関及び民間種畜会社での品種改良も行われている。 マメ科牧草は、窒素固定をするための根瘤菌の形成や家畜の胃の上から根瘤菌に由来しており、世界的に利用されている。特に、シロツメクサは、暑さに比較的強く、家畜飼料と飼料性が高い種であり、国内で利用可能な代替種は少ない。 多くの県の奨励品種に登録されており、生育が早められている。 緑化植物として広く利用されており、国内で開発された品種もあるようだが、現状は海外で生産されたものを使用している。 緑化植物として早期緑化(前草地や法面等)の観点から非常に優れており、広く利用されている。代替種の特定は困難。	③科中・B、④FAO:7、⑤対策：H20.6、H23.4、⑥専門家：河原 50、⑦各県、北海道・青森・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・長野・岐阜・静岡・愛知県・滋賀・京都・奈良・和歌山・鳥取・徳島・高知・福岡・長門・中分・宮崎・鹿児島、⑧河川・ISSG	世耕田、便宜、写真図鑑、PSW	石川、白山の外來植物 https://www.mlit.go.jp/par/hakusan/publication/document/size33.pdf[URL取得日:2026年3月13日]	環境省：高山植物を守るために https://www.mlit.go.jp/par/hakusan/data/data/20130402ab.pdf[URL取得日:2026年3月13日]	—	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
228	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			マメ科	外来クサフジ類(ピロードクサフジ(ヘアリーパー、シラゲクサフジ)、ナヨクサフジ(スムーズベツチ))	<i>Vicia villosa</i> esp. <i>villosa, Vicia villosa</i> esp. <i>varia</i>	河川敷や山地草原。	II、IV																ピロードクサフジはヨーロッパ～アジア原産。アフリカ、オーストラリア、南米に外来分布。ナヨクサフジはヨーロッパ原産。西アジアに外来分布。	1.5m、つる性	道端、畑地、牧草地、樹園地、荒地、河川敷、草地等。山地までもみられ、熱帯では高地にもみられる。	ヘアリーパーの名で、飼料や緑肥として栽培される。	河川に侵入して種子が拡散される場所へは、持ち込まない。	④FAO:6、⑥専門家：河原32、⑦各県、北海道・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知県・滋賀・京都・奈良・和歌山・鳥取・徳島・高知・福岡・長門・中分・宮崎・鹿児島、⑧河川・19.16.27、4.2	世耕田、便宜、緑化植物、写真、群馬県環境森林部自然環境課 2012、GW https://www.mlit.go.jp/meeting/issue/08/PH-24.html[URL取得日:2026年3月13日]	家野心、永山真衣、山本浩大：身近な場所で広がるナヨクサフジ -川辺以外のポリネーター特定と刈取時期の検討- https://www.mlit.go.jp/meeting/issue/08/PH-24.html[URL取得日:2026年3月13日]	—	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
229	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			バラ科	ピワ(ヒワ)	<i>Eriobotrya japonica</i>	石灰岩質の岩崖地。	IV																中国四川省、湖北省原産。北米、太平洋諸島、シベリア等に外来分布。	10m、常緑高木	日本では、暖地の石灰岩地で野生化している。海外では、農耕地、自然林、植林地、河川、荒地、かく乱地に生育する。	種々なる品種が食用に栽培される。葉用にも利用される。	河川の植物群落が生育する地域には、持ち込まない。	⑥専門家：岩崎13、⑦各県、福島・群馬・埼玉・千葉・東京・岐阜・静岡・愛知県・滋賀・京都・奈良・和歌山・鳥取・徳島・高知・福岡・長門・中分・宮崎・鹿児島、⑧河川・ISSG	便宜、木本1	—	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。				
230	定着初期/限定分布(小笠原・南西諸島にて注意)		産業管理 外来種			バラ科	パパイヤ(パパイア、パパイヤ、モッカ、チヂウリ)	<i>Carica papaya</i>	小笠原・南西諸島の森林や林縁。	II																熱帯アメリカ原産。世界の亜熱帯、熱帯に広く外来分布。	8m、草状常緑高木	南西諸島では、島やオオモリも果実を多く食べ、未成熟は野菜、完熟果は果物として利用される。	南西諸島では古くから民家の庭先等で栽培され、島やオオモリも果実を多く食べ、未成熟は野菜、完熟果は果物として利用される。	生物多様性の保全上重要な地域に侵入し、その生態系に悪影響を及ぼすおそれがある場合には、持ち込まない。	⑦各県、鹿児島、⑧その他、環境省関東、⑨農水省	写真図鑑、便宜、琉球樹木、小笠原、鹿児島県森林部自然環境課 2025 https://www.ajfa.or.jp/contents/files/gjyo_con_sulting/RA_oga_research_report.pdf[URL取得日:2026年3月13日]	一般社団法人日本森林技術協会：小笠原諸島における植生回復事例集(パパイア後占群落での森林回復(母島石門)) https://www.ajfa.or.jp/contents/files/gjyo_con_sulting/RA_oga_research_report.pdf[URL取得日:2026年3月13日]	—	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			
231	分布拡大期～まん延期		産業管理 外来種			マタタビ科	キウイフルーツ(シナナリナ)	<i>Actinidia chinensis</i> var. <i>deliciosa</i>	森林。	IV																中国原産。ヨーロッパ、北米に外来分布。	9m、つる性	分米時代には果実を受けやすいが、樹齢が満ちれば休眠中の樹皮は相当に強くなる。遅霜、風害には弱い。土壌条件は乾燥、過湿にも強い。カンキツ類の栽培地にはほぼ一致する。	日本にはニュージーランドで改良された品種が導入された。1969年に果生と果入蕾の初期果実を多く作り、近年栽培面積が増えている。種々なる品種がある。	河川や雑木林に侵入するおそれがある場合には、持ち込まない。繁殖力が高い種に注意し、河川や雑木林等から広がる場合に注意し、早急に対処する必要がある。種子をつつけ始めると急速に分布拡大の危険性がある。繁殖力が高いので、結果には注意が必要。	⑥専門家：鈴木7、⑦各県、福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・長野・岐阜・静岡・愛知県・滋賀・京都・奈良・和歌山・鳥取・徳島・高知・福岡・長門・中分・宮崎、⑧河川・0.5.10	便宜、木本1、有用、JF、Ylist、園芸事典、POWO	—	—	植物防疫法では輸入時に検疫を行うことが定められている。			





<種の抽出に利用した既存の文献等>

下記の文献等より全体で数百種類程度となるよう抽出を行った。

①特定外来生物と要注意外来生物

※要注意外来生物リストは、生態系被害防止外来種リスト(平成27年3月時点のリスト)の作成当時に抽出根拠として使用された。生態系被害防止外来種リストの公表に伴い、要注意外来生物リストは発展的に解消され、平成27年3月に廃止された。

②IUCNのワースト100 <http://www.iissg.org/database/species/search.asp?st=100ss&fr=1&str=&lang=EN>

及び日本の侵略的外来種ワースト100: 日本生態学会(2002)外来種ハンドブック. 地人書館.

③村中孝司・石井潤・宮脇成生・鷺谷いづみ(2005)特定外来生物に指定すべき外来植物種とその優先度に関する保全生態学的視点からの検討. 保全生態学研究10: 19-33.

④FAO方式による雑草性リスク評価結果:

外来生物のリスク評価と蔓延防止策(文部科学省科学技術振興調整費・重要課題解決型プロジェクト)による雑草性リスク評価、日本農学会(2008)外来生物のリスク管理と有効利用. 養賢堂.

⑤地方公共団体や民間団体により、対策の対象となっている種(数字は対策事例数)

環境省自然環境局野生生物課(2009)平成20年度外来種対策事例等に関する調査報告書.

環境省自然環境局野生生物課(2012)平成23年度外来種問題調査検討業務報告書.

⑥専門家アンケートで、ハビタットや在来種への影響が大きい(74人中5名以上があげた)種(数字は回答者数)

ハビタットの種類: 海洋島、水生植物群落、河原・崩壊地の貧栄養砂礫地、里山の二次草原、貧栄養湿地、砂浜海岸、高山植生、塩性湿地、雑木林・都市林、極相林、低地岩場、海岸の岩場

小池文人・小出可能・西田智子・川道美枝子(2010)専門家アンケートによる在来植物の脅威となる外来生物の重要度評価 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/hozen/20/1/20\\_KJ00010017170/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/hozen/20/1/20_KJ00010017170/_pdf/-char/ja)

⑦都道府県の外来種リストや条例に掲載されている種。なお、検討に当たっては2024年5月時点の掲載状況を参考とした。

⑧多くの河川で確認されている種と、確認される河川数が急激に増えている種(表の数字は3回の調査での確認河川数)

河川水辺の国勢調査1・2・3巡目調査結果総括検討[河川版](生物調査編)平成20年3月 国土交通省河川局河川環境課

[https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/download/h17made\\_soukatu.htm](https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/download/h17made_soukatu.htm)

⑨緑化植物に関する三省調査で、法面緑化地周辺において逸出が確認された種(括弧内は調査実施主体の略)

環境省自然環境局・農林水産省農村振興局・林野庁・国土交通省都市・地域整備局・国土交通省河川局・国土交通省道路局・国土交通省港湾局(2006)平成17年度外来生物による被害の防止等に配慮した緑化植物取扱方針検討調査委託事業報告書.

なお、生態系への影響に対応した望ましい取扱方向(案)の対象種は、イネ科植物、ハリエンジュ、(外国産)在来緑化植物とされている。

⑩海外の評価

ISSG掲載種: Lists of Invasive Alien Species (IAS), <https://www.iucngisd.org/gisd/>

⑪その他

検討会委員からの情報提供等

⑫2024年度に、リスト検討会委員、関係省、地方環境事務所及び地方公共団体等に行った意向調査であげられた種類。

<主な参考文献>

引用形式(略称)	文献
IPCW	Bossard, C. C., J. M. Randall and M. C. Hochovsky, 2000. Invasive Plants California's Wildlands. University of California, Berkeley. 360pp.
CABI	Centre of Agriculture and Biosciences International. Invasive Species Compendium. <a href="https://www.cabidigitallibrary.org/product/QI">https://www.cabidigitallibrary.org/product/QI</a>
海老原図鑑1	海老原淳, 2016. 日本産シダ植物標準図鑑1. 学研プラス, 東京.
FNA	Flora of North America. <a href="http://www.efloras.org/flora_page.aspx?flora_id=1">http://www.efloras.org/flora_page.aspx?flora_id=1</a>
GCW	Global Compendium of Weeds. <a href="http://www.hear.org/gcw/index.html">http://www.hear.org/gcw/index.html</a>
ブラジル	橋本悟郎, 1996. ブラジル産薬用植物事典. アポック社.
樹木	林弥栄, 1985. 山溪カラー名鑑日本の樹木. 山と溪谷社.
TWWW	Holm, L. G., D. L. Plucknett, J. V. Pancho and J. P. Herberger, 1991. The world's worst weeds. Krieger Publishing Company, Malabar, Florida. 609pp.
WWND	Holm, L., J. Doll, E. Holm, J. Pancho and J. Herberger, 1997. World weeds, Natural histories and distribution. John Wiley & Sons, Inc. 1129pp.
GAWW	Holm, L. G., J. V. Pancho, J. P. Herberger and D. L. Plucknett, 1991. A Geographical Atlas of World Weeds. Krieger Publishing Company, Malabar, Florida.
カヤツリグサ	星野卓二・正木智美・西本眞理子, 2011. 日本カヤツリグサ科植物図譜.
有用	堀田満・緒方健・新田あや・星川清親・柳宗民・山崎耕宇, 1989. 世界有用植物辞典. 平凡社.
PIER	Institute of Pacific Islands Forestry, Pacific Island Ecosystems at Risk (PIER) Plant threats to Pacific ecosystems. <a href="http://www.hear.org/pier/index.html">http://www.hear.org/pier/index.html</a>
シダ	岩槻邦男, 1992. 日本の野生植物シダ. 平凡社.
コケ	岩月善之助, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社.
JF	JFコード(日本花き取り引きコード)センター. <a href="http://www.jfcode.jp/TOP.aspx">http://www.jfcode.jp/TOP.aspx</a>
日本水草	角野康郎, 2014. ネイチャーガイド日本の水草. 文一総合出版.
梶田ほか2022	梶田結衣・米倉浩司・遠山弘法・赤井賢成・天野正晴・阿部篤志・内貴章世, 2022. 沖縄県西表島における外来植物目録. 大阪市立自然史博物館研究報告, 76: 125-141.
環境省2025	環境省, 2025. 令和7(2025)年度「特定外来生物の市区町村別侵入状況の把握のためのアンケート」調査(暫定).
Kaufman	Kaufman, S. R. and W. Kaufman, 2012. Invasive plants. A guide to identification, impacts, and control of common North American species. Stackpole Books. 518pp.
雑管	草薙得一・近内誠登・芝山秀次郎, 1994. 雑草管理ハンドブック. 朝倉書店.
イネ2	桑原義晴, 2008. 日本イネ科植物図譜. 全国農村教育協会.
950種	森昭彦, 2020. 帰化&外来植物見分け方マニュアル950種. 株式会社秀和システム.
目録	邑田仁・米倉浩司, 2012. 日本雑管束植物目録. 北隆館.
農研	農研機構畜産草地研究所. 写真で見る外来雑草. 侵入危険雑草種の発芽特性と防除方法. <a href="https://www.naro.go.jp/laboratory/nilgs/weed_prevention/index.html">https://www.naro.go.jp/laboratory/nilgs/weed_prevention/index.html</a>
野生植物1	大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司, 2015. 改訂新版日本の野生植物1. 平凡社, 東京.
野生植物2	大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司, 2016. 改訂新版日本の野生植物2. 平凡社, 東京.
野生植物3	大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司, 2016. 改訂新版日本の野生植物3. 平凡社, 東京.
野生植物4	大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司, 2017. 改訂新版日本の野生植物4. 平凡社, 東京.
野生植物5	大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司, 2017. 改訂新版日本の野生植物5. 平凡社, 東京.
琉球樹木	大川智史・林将之, 2016. ネイチャーガイド琉球の樹木. 奄美・沖縄〜八重山の亜熱帯植物図鑑. 文一総合出版.
琉球弧	大野照好・片野田逸朗, 1999. 琉球弧・野山の花. 南方新書.
イネ	長田武正, 1989. 増補日本イネ科植物図鑑. 平凡社.
観葉	尾崎章・河瀬晃四郎・山中雅也, 1991. 山溪カラー名鑑観葉植物. 山と溪谷社.
POWO	Royal Botanic Gardens, Kew, Plants of the World Online. <a href="https://powo.science.kew.org/">https://powo.science.kew.org/</a>
花粉	斎藤洋三・井出武・村山貢司, 2006. 新版・花粉症の科学. 化学同人.
熱帯花木	坂崎信之, 1998. 日本で育つ熱帯花木植栽事典. アポック社.
木本Ⅰ	佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫, 1989. 日本の野生植物木本Ⅰ. 平凡社.
木本Ⅱ	佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫, 1989. 日本の野生植物木本Ⅱ. 平凡社.
草本Ⅰ	佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫, 1982. 日本の野生植物草本Ⅰ 単子葉類. 平凡社.
草本Ⅲ	佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫, 1982. 日本の野生植物草本Ⅲ 合弁花類. 平凡社.
草本Ⅱ	佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫, 1982. 日本の野生植物草本Ⅱ 離弁花類. 平凡社.
緑化2023	生物多様性に配慮した緑化植物の取り扱いに関するガイドライン2023. <a href="https://www.jsrt.jp/tech/Tech_Files/teigen2019/guideline2023.pdf">https://www.jsrt.jp/tech/Tech_Files/teigen2019/guideline2023.pdf</a>
牧草	清水矩宏・宮崎茂・森田弘彦・廣田伸七, 2005. 牧草・毒草・雑草図鑑. 全国農村教育協会.
写真図鑑	清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七, 2001. 日本帰化植物写真図鑑. 全国農村教育協会.
写真図鑑	植村修二・勝山輝男・清水矩宏・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹, 2010. 日本帰化植物写真図鑑第2巻. 全国農村教育協会.
写真図鑑	植村修二・勝山輝男・清水矩宏・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹, 2015. 増補改訂日本帰化植物写真図鑑第2巻. 全国農村教育協会.
帰化植物	清水建美, 2003. 日本の帰化植物. 平凡社.
外来生物	自然環境研究センター, 2008. 日本の外来生物. 平凡社.
園芸	鈴木基夫・横井政人, 1998. 山溪カラー名鑑園芸植物. 山と溪谷社.
便覧	太刀掛優・中村慎吾, 2007. 改訂増補帰化植物便覧. 比婆科学教育振興会.
樹の花3	高橋秀男・勝山輝男, 2000. 山溪ハンディ図鑑3 樹に咲く花, 離弁花①. 山と溪谷社.
樹の花4	高橋秀男・勝山輝男, 2000. 山溪ハンディ図鑑4 樹に咲く花, 離弁花②. 山と溪谷社.
樹の花5	高橋秀男・勝山輝男, 2000. 山溪ハンディ図鑑5 樹に咲く花, 合弁花・単子葉・裸子植物. 山と溪谷社.
粗飼料	高野信雄, 1989. 粗飼料・草地ハンドブック. 養賢堂.
世雑Ⅰ	竹松哲夫・一前宣正, 1987. 世界の雑草Ⅰ—合弁花類—. 全国農村教育協会.

世雑Ⅱ	竹松哲夫・一前宣正, 1993. 世界の雑草Ⅱ—離弁花類—. 全国農村教育協会.
世雑Ⅲ	竹松哲夫・一前宣正, 1997. 世界の雑草Ⅲ—単子葉類—. 全国農村教育協会.
小笠原	豊田武司, 2003. 小笠原植物図譜(増補改訂版). アボック社.
小笠原固有	豊田武司, 2014. 小笠原諸島固有植物ガイド. ウッズプレス.
園芸事典	塚本洋太郎, 1994. 園芸植物大事典全3巻. 小学館.
USDA	United States Department of Agriculture, Natural Resources Conservation Service, Plants Database. <a href="http://plants.usda.gov/java/">http://plants.usda.gov/java/</a>
IPSW	Weber, E., 2003. Invasive Plant Species of the World, A Reference Guide to Environmental Weeds. CABI Publishing.
WFO	WFO, 2022. World Flora Online. Published on the Internet; <a href="http://www.worldfloraonline.org">http://www.worldfloraonline.org</a>
水草Ⅰ	山崎美津夫・山田洋, 1994. 世界の水草Ⅰ. ハロウ出版社.
水草Ⅱ	山崎美津夫・山田洋, 1994. 世界の水草Ⅱ. ハロウ出版社.
水草Ⅲ	山崎美津夫・山田洋, 1994. 世界の水草Ⅲ. ハロウ出版社.
YList	米倉浩司・梶田忠, 2003-. BG Plants 和名-学名インデックス(YList). <a href="http://ylist.info/">http://ylist.info/</a>

※URLは2025年8月に参照。ただし、一部は平成27年のリスト作成時や過年度納品物の引用によるものがある。

<種別の参考文献>

引用形式	文献	種名
勝山2013	勝山輝男, 2013. 静岡県麻機遊水地で発見された日本産新帰化植物アサハタヤガミスゲ(新称). 神奈川県立博物館研究報告. 自然科学, 42: 7-12.	アサハタヤガミスゲ
千葉・矢野2025	千葉道徳・矢野興一, 2025. 帰化種アサハタヤガミスゲ(カヤツリグサ科)新潟県に産す. 莎草研究, 27:35-37.	アサハタヤガミスゲ
半田2005	半田俊彦, 2005. 緑化植物どこまできわめるアツバキミガヨラン(Yucca gloriosa L.). 日本緑化工学会誌, 31(4): 450.	アツバキミガヨラン
山崎・田金2020	山崎海都・田金秀一郎, 2020. 鹿児島県の外来植物 V:アマゾンチカガミ Limnobium laevigatum (Humb. et Bonpl. ex Willd.) Heine. Nature of Kagoshima, 47: 245-248.	アマゾンチカガミ
金指ほか2023	金指あや子・菊地賢・大曾根陽子・澤田興之・野村勝重, 2023. 希少樹種ハナノキ自生地域への近縁外来種アメリカハナノキの植栽混入と侵入の実態. 日本生態学会第60回全国大会講演要旨.	アメリカハナノキ
菊池ほか2015	菊地賢・金指あや子・大曾根陽子・澤田興之・野村勝重, 2015. 絶滅危惧種ハナノキの自生地域における近縁外来種アメリカハナノキの植栽混入. 日本緑化工学会誌, 40(3): 457-464.	アメリカハナノキ
沖2013	沖陽子, 2013. 雑草の多面的機能を活用した環境修復に関する実証研究. 雑草研究, 58(4): 190-197.	アメリカミズユキノシタ
千葉県史料研究財団2003	千葉県史料研究財団, 2003. 千葉県の自然誌別編4千葉県植物誌. 県史シリーズ, 451. 千葉県.	アメリカヤガミスゲ
H16第1回G会合植物資料	平成16年第1回特定外来生物等分類群専門家グループ会合(植物)会議資料 <a href="https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/data/sentei/plant01/index.html">https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/data/sentei/plant01/index.html</a>	イチイツタ
海洋産業研究会2003	海洋産業研究会, 2003. 変異型イチイツタ(キラー海藻)の繁茂等に関する実態調査.	イチイツタ
小松2002	小松輝久, 2002. イチイツタ~キラー海藻, 日本海へ侵入. (日本生態学会編), 外来種ハンドブック, pp. 203. 地人書館.	イチイツタ
藤井・角野2010	藤井聖子・角野康郎, 2010. 外来水生植物ウチワゼニグサの除去方法の効果の検証. 水草研究会誌, 93: 30-33.	ウチワゼニグサ
H31第8回G会合植物資料	平成31年第8回特定外来生物等分類群専門家グループ会合(植物)議事概要 <a href="https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/data/sentei/plant08/gaiyou.pdf">https://www.env.go.jp/nature/intro/4document/data/sentei/plant08/gaiyou.pdf</a>	ウトウリクテリア・インフラタ、ウトウリクテリア・プラテンシス、エフクレタヌキモ
Kadono et al. 2019	Kadono, Y., T. Noda, K. Tsubota, K. Shutoh and T. Shiga, 2019. The identity of an alien Utricularia (Lentibulariaceae) naturalized in Japan. Acta Phytotaxonomica et Geobotanica, 70(2): 129-134. <a href="https://www.jstage.jst.go.jp/article/apg/70/2/70_201820/pdf">https://www.jstage.jst.go.jp/article/apg/70/2/70_201820/pdf</a>	ウトウリクテリア・インフラタ、ウトウリクテリア・プラテンシス
Titus & Gris�. 2009	Titus, J. E. and D. J. Gris�, 2009. The Invasive Freshwater Macrophyte Utricularia inflata (Inflated Bladderwort) Dominates Adirondack Mountain Lake Sites. The Journal of the Torrey Botanical Society, 136(4): 479-486.	ウトウリクテリア・インフラタ、ウトウリクテリア・プラテンシス
WA	Natural Resources WA Invasive Ranking System <a href="https://dnr.wa.gov/natural-heritage-program/ecosystems-washington/wa-invasive-ranking-system">https://dnr.wa.gov/natural-heritage-program/ecosystems-washington/wa-invasive-ranking-system</a>	ウトウリクテリア・インフラタ、ウトウリクテリア・プラテンシス
CARNIVOROUS PLANT NURSERY	CARNIVOROUS PLANT NURSERY <a href="https://carnivorousplantnursery.com/">https://carnivorousplantnursery.com/</a>	ウトウリクテリア・インフラタ、ウトウリクテリア・プラテンシス
古木2000	古木達郎, 2000. 日本新産のRiccia lamellosa Raddi(ウロコハタケゴケ:新称). 蘚苔類研究, 7(10): 314-316.	ウロコハタケゴケ
亀山・大原2007	亀山慶晃・大原雅, 2007. 浮遊植物タヌキモ類の繁殖様式と集団維持. 日本生態学会誌, 57: 245 - 250.	エフクレタヌキモ
五十嵐ほか2001	五十嵐博・丹羽真一・渡辺修・渡辺展之, 2001. 北海道羊蹄山の高等植物目録. 小樽市博物館紀要, 14: 91-117.	オオアワガエリ、カモガヤ
原田2014	原田修, 2014. ウトナイ湖での市民参加によるオオアワダチソウの抑制管理. モーリー, 37: 26-29.	オオアワダチソウ
農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所HP	農業・食品産業技術総合研究機構動物衛生研究所, 写真で見る家畜の有毒植物と中毒 <a href="http://www.naro.affrc.go.jp/org/niah/disease_poisoning/plants/index.html">http://www.naro.affrc.go.jp/org/niah/disease_poisoning/plants/index.html</a> (2017年3月参照)	オオオナモミ
農業・食品産業技術総合研究機構畜産草地研究所2013	農業・食品産業技術総合研究機構畜産草地研究所, 2013. 技術レポート13号夏作飼料作物における帰化雑草の発生実態調査報告書.	オオオナモミ
福原ほか2014	福原富士美・横田潤一郎・前村良雄・清水俊夫, 2014. 柿田川におけるオオカワヂシャの生態と駆除に関する課題. リバーフロント平成25年度研究所報告, pp. 105-113.	オオカワヂシャ
角野2010	角野康郎, 2010. オオカワヂシャの生態と分布の現状. 水草研究会誌, 93: 23-29.	オオカワヂシャ
藤井ほか2016b	藤井伸二・牧雅之・志賀隆, 2016. 新外来水草コウガイセキショウモおよびオーストラリアセキショウモの同定. 水草研究会誌, 103: 8-12.	オーストラリアセキショウモ、コウガイセキショウモ
Wasekura et al.2016	Wasekura, H., S. Horie, S. Fujii, M. Maki, 2016. Molecular identification of alien species of Vallisneria (Hydrocharitaceae) species in Japan with a special emphasis on the commercially traded accessions and the discovery of hybrid between nonindigenous V. spiralis and native V. denseserrulata. Aquatic Botany, 128: 1-6.	オーストラリアセキショウモ、コウガイセキショウモ
塚本1994	塚本洋太郎, 1994. 園芸植物大事典全3巻. 小学館.	オオバナイトタヌキモ
国土交通省淀川河川事務所2020	国土交通省淀川河川事務所, 2020. 淀川環境委員会配布資料. 令和元年度淀川環境委員会各部会からの報告. <a href="https://www.kkr.mlit.go.jp/yodogawa/activity/comit/kankyo_iinkai/bd083b0000004t52-att/01.houkoku.pdf">https://www.kkr.mlit.go.jp/yodogawa/activity/comit/kankyo_iinkai/bd083b0000004t52-att/01.houkoku.pdf</a>	オオバナミズキンバイ
須山ほか2008	須山知香・佐藤杏子・植田邦彦, 2008. 侵略的水草Ludwigia grandiflora subsp. grandiflora(新称:オオバナミズキンバイ、アカバナ科)の野外生育確認およびその染色体数. 水草研究会誌, 89: 1-8.	オオバナミズキンバイ
内藤ほか2014	内藤麻子・稗田真也(2014)和歌山の帰化植物その8 オオバナミズキンバイ(アカバナ科)博物館だより. 32(3): 5.	オオバナミズキンバイ
Peterson et al. 2022	Peterson, P. M., R. J. Soreng, K. Romaschenko, P. Barber�, A. Quintanar, C. Aedo, and J. M. Saarela, 2022. Phylogeny and biogeography of Calamagrostis (Poaceae: Pooideae: Poeae: Agrostidinae), description of a new genus, Condilorachia (Calothecinae), and expansion of Greeneochloa and Pentapogon (Echinopogoninae). Journal of Systematics and Evolution, 60(3): 570-590.	オオハマガヤ、ビーチグラス
一澤2007	一澤麻子, 2007. 多摩川中流域における河川敷植生の復元と管理についての研究. とうきゅう環境浄化財団.	オオフタバムグラ

佐藤1999	佐藤恭子, 1999. シナダレスズメガヤが定着した礫洲における砂泥の堆積と植生との関係. 神奈川県立自然保護センター報告, 16: 1-8.	オオフトバムグラ
浅井1993	浅井康宏, 1993. 緑の侵入者たち(帰化植物のはなし). 朝日選書. 朝日新聞社.	オニハマダイコン
吉田2015	吉田寛, 2015. コマツナギ( <i>Indigofera pseudo-tinctoria</i> Matsum.), 中国産コマツナギ, キダチコマツナギ( <i>Indigofera</i> spp.). 日本緑化工学会誌, 41(2): 351.	外国産コマツナギ
吉田・森本2005	吉田寛・森本幸裕, 2005. 法面緑化における中国産コマツナギと常緑広葉樹の混播効果に関する研究. 日本緑化工学会誌, 31(2): 269-277.	外国産コマツナギ
森田・芝池2012	森田竜義・芝池博幸, 2012. 雑種タンポポ研究の現在—見えてきた帰化種タンポポの姿. (森田竜義編), 帰化植物の自然史—侵略と攪乱の生態学, pp. 213-238. 北海道大学出版会.	外来性タンポポ種群
Bhattほか2012	Bhatt, J. R., J. S. Singh, S. P. Singh, R. S. Tripathi, and R. K. Kohli, 2012. Invasive Alien Plants, An ecological Appraisal for the Indian Subcontinent. CAB International.	カッコウアザミ、ランタナ類
鈴木ほか1984	鈴木住夫・伊藤操子・植木邦和, 1984. ギンギシの地下部切断片の再生力について. 雑草研究, 29(1): 51-54.	ギンギシ
EPPO	European and Mediterranean Plant Protection Organization (EPPO) Global Database. <a href="https://gd.eppo.int/">https://gd.eppo.int/</a>	キダチカッコウアザミ
中野・本多2013	中野真理子・本多郁夫, 2013. 石川県新産キク科外来種キバナコウリンタンポポ <i>Pilosella caespitosa</i> (Dumort.) P.D.Sell et C.West. とハイコウリンタンポポ <i>Pilosella officinarum</i> F. Schultz & Schultz-Bip. 石川県立自然史資料館研究報告, 3: 11-14.	キバナコウリンタンポポ、ハイコウリンタンポポ
畑・可知2009	畑憲治・可知直毅, 2009. 小笠原諸島における野生化ヤギ排除後の外来木本種ギンネムの侵入. 地球環境, 14(1): 65-72.	ギンネム
環境省九州地方環境事務所那覇自然環境事務所2010	環境省九州地方環境事務所那覇自然環境事務所, 2010. 平成21年度奄美地域における国立公園特別地域内放出規制植物種検討調査業務報告書.	ギンネム
Gaskin & Schaal 2002	Gaskin, J. F., and B. A. Schaal, 2002. Hybrid Tamarix widespread in US invasion and undetected in native Asian range. Proceedings of the National Academy of Sciences, 99(17): 11256-11259.	ギョリュウ属
片山・狩山2012	片山久・狩山俊悟, 2012. 岡山市に広がりにつつある帰化水草の <i>Lagarosiphon major</i> . しぜんしくらしき, 80: 2-5.	クロモドモキ
徳島県県土整備部 東部県土整備局 2013	徳島県県土整備部東部県土整備局, 2013. 徳島東環状線阿波しらすさぎ大橋環境モニタリング調査平成23年度報告書. <a href="https://www.pref.tokushima.lg.jp/ippannokata/kendozukuri/toshikeikaku/2012111600138/">https://www.pref.tokushima.lg.jp/ippannokata/kendozukuri/toshikeikaku/2012111600138/</a>	ケナシヒメムカシヨモギ
池原1979	池原直樹, 1979. 沖縄植物野外活用図鑑 第2巻 栽培植物【沖縄・琉球・自然・生物・野草】. 新星図書出版.	ケブカルイラソウ
鹿児島県外来種リスト2025	鹿児島県外来種リスト(2025(令和7)年3月改正) <a href="https://www.pref.kagoshima.jp/ad04/kurashi-kankyo/kankyo/yasei/gairai/documents/51561_20250403171036-1.pdf">https://www.pref.kagoshima.jp/ad04/kurashi-kankyo/kankyo/yasei/gairai/documents/51561_20250403171036-1.pdf</a>	ケブカルイラソウ、ベニツツバナ、パイアヤ、ナピアグラス
小杉2014	小杉和樹, 2014. 利尻島でも外来植物の駆除, 対策. モーリー, 37: 30-33.	コウリンタンポポ
武田2007	武田洋之, 2007. 礼文島の外来植物の現状. 北方山草, 24: 21-28.	コウリンタンポポ
河津・古木2005	河津英子・古木達郎, 2005. 日本新産の <i>Riccia nigrella</i> DC. (サビイロハタケゴケ 新称). 蘚苔類研究[Bryol. Res.], 9: 6-11.	サビイロハタケゴケ
Lowry & Plunkett 2020	Lowry II, P. P., and G. M. Plunkett, 2020. Resurrection of the genus <i>Heptapleurum</i> for the Asian clade of species previously included in <i>Schefflera</i> (Araliaceae). Novon: A Journal for Botanical Nomenclature, 28(3): 143-170.	シェフレラ・アクチノフィラ
環境省自然環境局 生物多様性センター	環境省自然環境局生物多様性センター. 植生調査概要. 統一凡例一覧表. 二次草原(大区分). スズメノコビエ群落(中区分). シマスズメノヒエスズメノコビエ群落(小区分). <a href="http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-016.html">http://gis.biodic.go.jp/webgis/sc-016.html</a>	シマスズメノヒエ
牧野1961	牧野富太郎, 1961. 牧野新日本植物図鑑. 北隆館.	シマトベラ
大森2010	大森威宏, 2010. 群馬県新産外来植物・シラユキゲシ ( <i>Eomecon chionantha</i> Hance: ケシ科). 群馬県立自然史博物館研究報告, 14: 125-126.	シラユキゲシ
比良松2012	比良松道一, 2012. 帰化能力を進化させた球根植物タカサゴユリ. (森田竜義編), 帰化植物の自然史, pp. 197-211. 北海道大学出版会.	シンテツポウユリ
Neira et al. 2005	Neira, C., L. A. Levin, and E. D. Grosholz, 2005. Benthic macrofaunal communities of three sites in San Francisco Bay invaded by hybrid <i>Spartina</i> , with comparison to uninvaded habitats. Marine Ecology Progress Series, 292: 111-126.	スパルティナ属
黒田ほか2023	黒田有寿茂・中濱直之・早坂大亮・玉置雅紀・花井隆晃, 2023. 干潟に生育する大型草本スパルティナ・アルテルニフロラ <i>Spartina alterniflora</i> : 生態特性と山口県下関市における侵入. 保全生態学研究, 28(1): 199-212.	スパルティナ属
相澤ほか2015	相澤章仁・田中愛子・小林弘和・小林達明, 2015. 利根運河堤防部における在来草原性植物群落に対する外来植物の影響評価. 日本緑化工学会誌, 40(4): 527-533.	セイバンモロコシ
奄美野生生物保護センター2024	奄美野生生物保護センター, 2024. 外来植物対策の優先度リスト. <a href="https://kyushu.env.go.jp/okinawa/awcc/alien-priority.html">https://kyushu.env.go.jp/okinawa/awcc/alien-priority.html</a>	セイヨウミズユキノシタ
関東地方環境事務所ほか2014	関東地方環境事務所・関東森林管理局・東京都・小笠原村, 2014. 世界自然遺産小笠原諸島生態系アクションプラン【第2期】.	ソウシジュ、リュウキュウマツ、テリハバンジロウ、モンツキガヤ
大西・勝山2011	大西亘・勝山輝男, 2011. 伊豆半島に帰化したナス科の世界的侵略種ダイオウナスビ(新称). 植物研究雑誌, 86(4): 253-255.	ダイオウナスビ
加藤2004	加藤英寿, 2004. 在来植物を追いやる外来植物. 神奈川県立生命の星・地球博物館(編), 東洋のガラパゴス 小笠原—固有生物の魅力とその危機—, pp. 107-113.	タイワンモクゲンジ
石嶺1987	石嶺行男, 1987. 琉球列島におけるサトウキビ畑の雑草植生の実態と強害草の生態・生理学的研究. 琉球大学農学部学術報告, 34: 95-185.	タチスズメノヒエ
厚生労働省HP	厚生労働省, 自然毒のリスクプロファイル: 高等植物: チョウセンアサガオ類1(チョウセンアサガオ). <a href="http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000060246.html">http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000060246.html</a> 65. 厚生労働省, 自然毒のリスクプロファイル: 高等植物: チョウセンアサガオ類2(キダチチョウセンアサガオ). <a href="http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000061069.html">http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000061069.html</a> 66. 厚生労働省, 自然毒のリスクプロファイル: 高等植物: ヨウシュヤマゴボウ. <a href="https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000079871.html">https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000079871.html</a>	チョウセンアサガオ属、ヨウシュヤマゴボウ
藤本ほか1990	藤本滋生・松元健二・山中修・菅沼俊彦・永浜伴紀, 1990. 本邦に自生する植物の澱粉に関する研究第16報ツルドクダミ, モミジヒルガオ, ヤマノイモの澱粉について. 澱粉科学, 37(1): 7-11.	ツルドクダミ
竹松・一前1987	竹松哲夫・一前宣正, 1987. 世界の雑草 I—合弁花類—. 全国農村教育協会.	ツルヒヨドリ

橋本ほか2003	橋本佳延・服部保・石田弘明・赤松弘治・田村和也, 2003. 猪名川におけるトウネズミモチの分布. 人と自然, 14: 55-61.	トウネズミモチ
橋本ほか2005	橋本佳延・服部保・石田弘明・戸井可名子, 2005. 国内における外来樹木トウネズミモチの野外逸出. ランドスケープ研究, 68(5): 713-716.	トウネズミモチ
藤原ほか2008	藤原道郎・大藪崇司・澤田佳宏・山本聡, 2008. 分布情報を基にした島嶼生態系における特定外来生物ナルトサワギク ( <i>Senecio madagascariensis</i> Pioret) の防除可能性. 平成19年度共同研究報告書外来植物種のフェノロジーに関する解明と住民への情報発信・協働による駆除方法の検討, pp. 8-17. 兵庫県立淡路景観園芸高校.	ナルトサワギク
小池ほか2015	小池文人・小出可能・西田智子・川道美枝子, 2015. 専門家アンケートをもとにした一対比較による在来植物の脅威となる外来生物の重要度評価. 保全生態学研究, 20: 87-100.	ナルトサワギク
Maesako et al.2007	Maesako, M., S. Nanami, and M. Kanzaki, 2007. Spatial distribution of two invasive alien species, <i>Podocarpus nagi</i> and <i>Sapium sebiferum</i> , spreading in a warm-temperate evergreen forest of the Kasugayama Forest Reserve. Japan Vegetation Science, 24: 103-112.	ナンキンハゼ
奥川・中坪2009	奥川裕子・中坪孝之, 2009. 外来木本ナンキンハゼの逸出とその制限要因. 広島大学総合博物館研究報告, 1: 63-70.	ナンキンハゼ
French,K.2021	French, K., 2021. Invasion by hawkweeds. Biol Invasions, 23: 3641-3652.	ハイコウリンタンポポ
持田2012	持田誠, 2012. 帯広市新産外来種ハイコウリンタンポポ <i>Hieracium pilosella</i> L. 帯広百年記念館紀要, 30: 11-14.	ハイコウリンタンポポ
立松2022	立松和晃, 2022. 福井県内で新たに確認された外来植物ハイコウリンタンポポ <i>Pilosella officinarum</i> F. Schultz & Schultz-Bip. 福井市自然史博物館研究報告, 第69号: 97-100.	ハイコウリンタンポポ
植村2013	植村修二, 2013. ハイコウリンタンポポ <i>Hieracium pilosella</i> L. の逸出. 全農教・日本帰化植物友の会通信, No11.	ハイコウリンタンポポ
勝山ほか2011	勝山輝男・支倉千賀子・小久保恭子, 2011. 伊豆諸島青ヶ島の維管束植物. Bull. Kanagawa prefect. Mus.(Nat. Sci.), 40: 7-34.	ハナシユクシャ
田中・田中2018	田中優太郎・田中麻理, 2018. 屋久島における外来植物の観察記録. Nature of Kagoshima, 44: 383-386.	ハナシユクシャ、ベンガルヤハズカズラ
Mostow et al. 2021	Mostow R. S., F. Barreto, R. Biel, E. Meyer, and S. D. Hacker. 2021. Discovery of a dune-building hybrid beachgrass ( <i>Ammophila arenaria</i> x <i>A. breviligulata</i> ) in the U.S. Pacific Northwest, Ecosphere 12, e03501.	ビーチグラス
Askerooth et al. 2024	Askerooth R., R. S. Mostow, P. Ruggiero, F. Barreto, S. D. Hacker. 2024. A novel hybrid beachgrass is invading U.S. Pacific Northwest dunes with potential ecosystem consequences, Ecosphere 15, e4830.	ビーチグラス
Mostow et al. 2024	Mostow R. S., F. Barreto, and S. D. Hacker. 2024. A hybrid beachgrass ( <i>Ammophila arenaria</i> x <i>A. breviligulata</i> ) is more productive and outcompetes its non-native parent species, Oecologia 205, 81-94.	ビーチグラス
服部ほか1996	服部保・澤田佳宏・小館誓治・浅見佳世・石田弘明, 1996. 都市林の生態学的研究 I. 宝塚市ニュータウン内のオオバヤシャブシーセイヨウイボタ群落. 人と自然, 7: 73-87.	ヒイラギナンテン
askifas	askifas <a href="https://edis.ifas.ufl.edu/">https://edis.ifas.ufl.edu/</a>	ヒマワリカッコウ
NSW Government	NSW Government <a href="https://www.dpi.nsw.gov.au/">https://www.dpi.nsw.gov.au/</a>	ヒマワリカッコウ
初島・天野1994	初島住彦・天野鉄夫, 1994. 琉球植物目録. 沖縄生物学会.	ヒメイワダレソウ
多和田・池原1989	多和田真淳・池原直樹, 1989. 沖縄植物野外活用図鑑第8巻ばら科~きつねのまご科. 新星図書.	ヒメイワダレソウ
角野2021	角野康郎, 2021. 富山県高岡市の湧水に野生化した外来水生植物ヒメウキオモダカ(新称) <i>Sagittaria subulata</i> (L.) Buch.(オモダカ科). 植物地理・分類研究, 69(2): 225-231.	ヒメウキオモダカ
森井・小玉2006	森井愛・小玉芳敬, 2006. 鳥取砂丘における植生被覆に伴う飛砂量の減少. 地域学論集 鳥取大学地域学部紀要, 3: 123-133.	ヒメスイバ、マンテマ
naturplant3752	帰化植物メーリングリスト(naturplant@ml.affrc.go.jp) naturplant: 3752	ヒメヒオウギズイセン
新垣2024	新垣裕治, 2024. 羽地内海及び屋我地島周辺におけるヒルギダマシ <i>Avicennia marina</i> 及びウラジロヒルギダマシ <i>A. alba</i> の分布拡大と駆除に関する考察. 名桜大学紀要, 28: 1-8.	ヒルギダマシ
新垣ほか2013	新垣裕治・山田慶紀・比嘉博斗, 2013. 沖縄県屋我地島の饒平名干潟に分布拡大するヒルギダマシ ( <i>Avicennia marina</i> ) に関する研究: 国内移入したマンダラ草の分布動態. 名桜大学総合研究所紀要, (22): 17-23.	ヒルギダマシ
伊藤ほか2001	伊藤風香・大窪久美子・馬場多久男, 2001. 南アルプス戸台川中、下流域における河辺植生に及ぼす帰化植物の影響. ランドスケープ研究, 64(5): 577-582.	フサフジウツギ
六甲山系電子植生図鑑	国土交通省 近畿地方整備局 六甲砂防事務所, 六甲山系電子植生図鑑. <a href="https://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/rokko/vegetation/index.html">https://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/rokko/vegetation/index.html</a>	フサフジウツギ
大窪・岡2005	大窪久美子・岡雅文, 2005. 三峰川水系における帰化植物フサフジウツギと在来近縁種の分布状況及び環境条件. ランドスケープ研究, 68(4): 301-304.	フサフジウツギ
猪瀬ほか2015	猪瀬礼璃菜・兼子伸吾・黒沢高秀, 2015. 福島県喜多方市ひめさゆりの丘の植物相と絶滅危惧植物の現状. 福島大学地域創造, 26(2): 124-141.	ブタナ
藤井ほか2016a	藤井聖子・中村俊之・山ノ内崇志・角野康郎, 2016. 徳島県海部川水系母川における外来水生植物ラージパールグラス侵入の現状. 水草研究会誌, 103: 1-7.	マルバヒメアメリカアゼナ
金子2023	金子誠也, 2023. 熊本県恵津湖で新たな外来植物の侵入を確認. モニタリングサイト1000ニュースレター, 16.	マルバヒメアメリカアゼナ
水田2020	水田光雄, 2020. [naturplant:6819] マルバヒメアメリカアゼナ(ラージパールグラス)の帰化について. 帰化植物ML(naturplant@ml.affrc.go.jp).	マルバヒメアメリカアゼナ
中田・川住2015	中田政司・川住清貴, 2015. 富山県高岡市で野生化した外来水草ラージパールグラス. 富山県中央植物園研究報告, 21: 23-27.	マルバヒメアメリカアゼナ
副島ほか1990	副島和則・山田卓三・長谷川二郎, 1990. 近畿地方におけるミカツキゼニゴケの生活史. 日本蘚苔類学会会報, 5(6): 91.	ミカツキゼニゴケ
嶋村・出口2001	嶋村正樹・出口博則, 2001. ミカツキゼニゴケの胞子体について. 蘚苔類研究, 8(2): 54.	ミカツキゼニゴケ
Hattori1944	Sinsuke Hattori, 1944. Hepaticarum species novae et minus cognitae nipponenses(II). 植物学雑誌, 58巻, pp. 1-7.	ミカツキゼニゴケ
久米2021	久米修, 2021. 香川県産植物目録・補遺5. 香川生物, 48: 63-73.	ミズヒナゲシ
USDA2021	United States Department of Agriculture Animal and Plant Health Inspection Service, 2021. Weed Risk Assessment for <i>Hydrocleys nymphoides</i> (Alismataceae).	ミズヒナゲシ
外来種影響・対策研究会2008	外来種影響・対策研究会, 2008. 河川における外来種対策の考え方とその事例【改定版】—主な侵略的外来種の影響と対策—.	ミズヒマワリ
麦倉ほか2022	麦倉佳奈・Eldrin DLR. Arguelles・鎌倉史帆・大塚泰介・佐藤晋也, 2022. ミズワタクチビルケイソウ <i>Cymbella janischii</i> の近畿地方からの初記録およびその生細胞の形態観察. Diatom, 38: 49-53.	ミズワタクチビルケイソウ

水産庁2024	水産庁, 2024. 外来魚に立ち向かう.	ミズワクテビルケイソウ
工藤2006	工藤洋, 2006. 日本産ジャニンジン・タネツケバナ・ミチタネツケバナ・コタネツケバナ (アブラナ科, タネツケバナ属) に関するノート. 分類, 6(1): 41-49.	ミチタネツケバナ
Flora of China	Flora of China <a href="http://www.efloras.org/flora_page.aspx?flora_id=2">http://www.efloras.org/flora_page.aspx?flora_id=2</a>	モウソウチクなどの竹類
南海日日新聞2024	南海日日新聞, 2024. 大瀬海岸で外来種駆除 浸食したモクマオウ伐採除去 奄美市笠利町(南海日日新聞2024年11月22日). <a href="https://www.nankainn.com/news/">https://www.nankainn.com/news/</a>	モクマオウ
山田・辻村2020	山田宏之・辻村双葉, 2020. 奈良市における4種の観葉植物の都市定着現況に関する研究. 土木学会論文集 G (環境), 76(6): II 91-II 99.	ヤドリフカノキ
宮本ほか2007	宮本裕美子・石川慎吾・三宅尚, 2007. 外来種キツネノマゴ科ヤナギバルイラソウの生態学的特性と侵略性. 日本生態学会第54回全国大会講演要旨集. 一般講演 P3-164. <a href="http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/ESJ54/P3-164.html">http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/ESJ54/P3-164.html</a>	ヤナギバルイラソウ
中村2019	中村肇, 2019. 名古屋市守山区におけるヤナギバルイラソウの記録. なごやの生物多様性, 6: 93-94.	ヤナギバルイラソウ
北海道白老郡白老町2011	北海道白老郡白老町, 2011. ヨコスト湿原自然環境調査報告書.	ユウゼンギク
石狩浜海浜植物保護センター2006	石狩浜海浜植物保護センター, 2006. 石狩川河口湿地部における植生モニタリング区設置と植生概況(2003年度石狩浜海浜植物保護センター調査研究報告). 石狩浜海浜植物保護センター調査研究報告第2号.	ユウゼンギク
茨木ほか2015	茨木靖・大森威宏・勝山輝男・木下覚・久米修・木場英久・齋藤政美・野津貴章, 2015. 日本国内におけるヨシススキ <i>Erianthus arundinaceus</i> (Retz.) Jeswiet. (イネ科) の分布と生育状況について. 植物地理・分類研究, 62(2): 85-92.	ヨシススキ
多和田・池原1979	多和田真淳・池原直樹, 1979. 沖縄植物野外活用図鑑第3巻帰化植物. 新星図書.	ヨシススキ
山田2015	山田守, 2015. 緑化植物ど・こ・ま・で・き・わ・め・る. 日本緑化工学会誌, 41(2): 352.	ヨシススキ
角野2013	角野康郎, 2013. 消えるアゾラ・クリスタータ、広がる雑種アゾラ. 水草研究会誌, 99: 44-50.	外来アゾラ類
群馬県環境森林部自然環境課2012	群馬県環境森林部自然環境課, 2012. 群馬県の絶滅のおそれのある野生生物(群馬県レッドデータブック)植物編2012年改訂版.	外来クサフジ類
櫻井ほか2022	櫻井善文・矢部和夫・片桐浩司・椎野亜紀夫, 2022. 日本の寒冷地小河川におけるクサヨシ除去による沈水植物復元の検証. 湿地研究, 12: 早期公開版 1-15.	外来クサヨシ(リードカナリーグラス)
上山・久保田2009	上山泰史・久保田明人, 2009. 東北地域におけるクサヨシ遺伝資源の探索・収集. 植探報, 25: 25-28.	外来クサヨシ(リードカナリーグラス)
いがり2007	いがりまさし, 2007. 山溪ハンディ図鑑11日本の野菊. 山と溪谷社.	栽培キク属
中田1997	中田政司, 1997. 園芸ギクが野生ギクを滅ぼす? (八尋洲東編集, 朝日百科植物の世界 I 種子植物双子葉類1), pp. 56. 朝日新聞社.	栽培キク属

※URLは2025年8月に参照。ただし、一部は平成27年のリスト作成時や過年度納品物の引用によるものがある。